

卷之三

ハ教官戸の流动化の内容と移転推進派の動向
我々の百五十日以上に及ぶ本體封鎖を軸とし、
ケードストライキー9月以降の思潮ストの展

へ教官局の流动化の内容と移転推進派の動向
我々の百五十日以上に及ぶ本饅封鎖を軸としたバ
リケードストライキ—9月以降の暴虐ストの展開は
教授局の动摇。流动化を生じさせ、調査に計上白紙
撤回、NAP委員会停止は既に因縁でなくなり、6.10
土地確保決定の白紙撤回へつき進むか、大學斗局の
収拾運動の前に敗退してゆくかどうかということな
のである。6.10決定白紙撤回→滋賀移転全面白紙
は現局面を正確に把握しなければならない。

文・教・農教授官の「事態収拾」正常化への提案
農政復興法は、22日次の七項目を決定した。それは

伊勢守の文集

による教授法の流動化に規定され、一連に移転進歩主義の流れが生じていて、そこには次のように「自己性」が表面化しているが、そこには次のよきな問題があることとを徹底的に批判してゆかなければならぬ。まあ近々要る、(1)・(2)・(3)決定白紙取扱い研修としていること。これは、(1)・(2)・(3)決定を既成事実とした上で「譲歩」とその「再検討」を組みものであり、我々としては容認できないものであること。(2)それは、「いみにしたら学生のストをやめさせることができない」という発想があり、推進の收拾策動に吸収される可能性が大きいこと。(3)曰く学生参加は、従つて策動に対する価値判断を欠落させた二元論的なものである。即ち学生の策動を止める草に「ことは、6・10決定を固定化させ「話し合い柱廻り」をもたらしていることはまちであるが、同時に、それが協調セミナーをつくる以外のなにものでもないことを。かかる教授法の流動化が移転進歩主義の弱体化の限界は、容易に移転進歩主義の收拾策動に吸収されるものであることを確認し收拾策動の問題性を徹底的にバクロしていかねばならない。

だが、教授局の流动化をもつてたたちに因交実現を夢見る二とはできない。18日の文部省大學學術局長ヒ三輪前學長、現學長、橋田Mア委員長の意見は、そのことはつきりと物語つている。即ち、その意見不明确になつたことは、(1) 6・10決定、6・14文部省への意向表明は、大學の正式な意思表示と受け取つていい。(2) 文の6・21声明は6・10決定を变更撤回するものではない。(3) 調査ヒについて大蔵省への概算要求は文部省としては処理済である。——ということなのだ。このことは、政府文部省が教育大の派移動を既定方針とおり實にくことにならぬみなみならぬ不適を示しており、6・10決定はとの生硬線的なものだ。政府文部省は、かかる口了承を、移動推進派への「激励」として「紛争の早期解決、授業再開」の相鳴へ15日次官通達と同時に与えているのである。そして推進派は、政府文部省のベック・アーリアのものと、まきかえしの拳に出ようとしているのである。そのゆ一聲か、14日學長「回答しに對する」理教説公の「不満と批判」であるのだ。文、農、教立場にあるが、理教説公は、「各学部間、教授公内の意見調査を先送りあり、現時実では学生との接觸は全く必要ない」という形で、事實上、14日學長

てゐるのである。確かに、理にあひても、先日の學部長選では移本派推進派と倒して小寺へ復長派が当選する所から重慶を流动化現象がみられるが、小寺当選は鉄礎論よりは仙人の感覚による反撫田統一戦線による勝利であると見ることを妥当であるし、現に、理では、スト切り崩し策動として、(1)授業再開アモケート(2)4年の切りはなし授業(3)大量留年、タイム・リミットの相場による授業再開宣言など、具体的な策動を準備しているのだ。かかる理の反動的対応は、22日の評議会における「統一した弓弓の方針を具体化させず、收拾へむけての方針が確定でき本にいる」というのが現状であろう。かかる視点より先日の学長「回答」を考る時、それは、各教授弓の恩怨を抽象的に寄みうる接ちやう案としてどうえることが妥当である。

事態收拾へむけての敵のコースは何か

大学上弓部の「授業再開リ事態收拾へむけてのコースはどのようなものであらうか」これを規定する内閣は(1)政府文部省の意向(2)教授弓の流动(3)学生の斗いであることはいうまでもない。それに時間的なものがアラスされたり、收拾へのコースしか決定されるのだ。移転推進派(4)政府文部省との確認していることは(5)10決定死守であり、それを大前提とする形で(6)学生のストの收拾(7)教授弓の抱き込みを如何になしらるかとして方針はたてられるであろう。当面推進派の動きを規定しているのは、まずやーに、(8)学生の長期的な里学ストであり、彼らは学生は、調査七課MP委の「譲歩」ではひきとうにもないと判断している。(9)教授弓の流动化、不信に対するのは、里工の流动化が6・10白紙撤回にまで到つていなければ(10)一定の「安心感」を覚えつつ、に最もかわらず、それを放置しておくなら、学生の斗い如何、あるいは、自らの失敗如何では6・10も危うくなると考えているであろうし、なんとかして、この流动化を事態收拾に利用し、中途でこれを自らのイニシアに包摵できないものかと苦慮中であるはずだ。(11)更に政府文部省からは、「授業再開しの相談が事務局長の「助言」とともに加えられてゐる。なるさまさまた恩怨と要因が、移転推進派の動きを規定しこそりののであり、移転推進派の事態收拾へむけこのコースも單純ではありえない。当面、彼らは、

毎回の収相案は一矢それに拘束されることはになる。即ち、大衆団交はしないことを前提に、各学部の語りのつみ上げをやっていく。(12)又、理教授会に對しては、二面作戦へ「話し合いレポート」とテマと相場による巻き返しをはかり、(13)学生のストの弱体化をタイムリミットなどの威しではかつていくことである。そして、彼らの推進体制の弱体化を防いだり、(14)「譲歩」の検討を行つたのちに、事態收拾の見透しがついた地表で、更に「收拾」策をうち出すと、(15)学生の斗いを更に強化していくこと。当面は、(16)方向は、かねる如く既定されねばならぬ。即ち、(17)学生の斗いを更に強化していくこと。当面は、(18)10決定白紙撤回までの無期限ストを全学事においてかちること。(2)更に院生をも結集させること。(3)教官弓の流动化か、我々の斗いによって招來したこと。だということを確信すると同時に、現在の流动化のリ相案の限界を徹底的にバクロし、教官弓の間に、(4)「10決定を焦滅化していくこと。(5)「話し合い」路線への幻想を絶ち切り、我々の實力斗争の物質化を、あらゆる戦術エスカレートを通じてなし、大学上弓部の収相案動をなしえないようにはれていくこと。我々は、一般的に戦術エスカレートを自己目的化するものではない。現在の地表で、大学当局、更には、教授弓が、(6)10決定白紙撤回を考えていなことは明白であり、我々は、そうした段階において、各学部において、收拾案の限界性を徹底的にバクロすることを通じて、主体の形成をはかると同時に、我々の要求擴張の意志をはかつていくべく、里工の収相コースは、我々の斗いによつて天まつてくるので、各学部をめざして斗つてゆかねばならない。敵の収相コースは、我々の斗いによつて天まつてくるので、我々は、なによりも、我々の斗いの強化こそが、勝利へむけての唯一の展望であることを確ろし、敵の理、農、教ストの切り崩し、文自斗の孤立化の策動を「話し合い」のホーネと「譲歩」でなく、なんぞすることを、全力を集中してはゆかえしてゆかねばならない。

(1) 学生の中に一定に話し合いムードをじょう成し、話し合いし路線の幻想をはらまくこと。他学部教

④以上の項目の大衆団交席上の確認。
今後は、単なる大衆団交要求にとどめず、以上七項目の具体的要求をかねて大学当局に迫っていきたい。
我々は、現在、オホシ会議路線に拘泥するばかりではなく、大衆団交を実現したうえで問題は解決するといつた幻想を捨てよ。していかなければならぬ。
大衆団交の実現とそこに及ぶる内容（民族敵國が至らし）は、我々の無期限ストと星学封鎖に向けこの斗争によつて規定されるということは、つきりさせたい。こう。本日、拒否回答が与えられるならば、12月8日に期限をくぎり更に学長に我々の要求をつきつけたい。

④学部斗争委員会、クラス斗争委員会の再確立。
クラスにおける組織化の徹底とが斗争の長期にわたる展開を保障する。現在、各クラスにおいて分散的反対決議が進行している。11月下旬より同上旬に政黨的反対決議を展開していくためにもこれを更迭していくことが必須である。この間の流動化しつつある局面を的確に把握し、12月2日の百六十日実現大集会をめざし、七項目要求策を前に、全国いつぱいクラスの徹底的な組織化を図らねばならない。勝利の鍵はここにあるのだ。再度、クラス斗争委員会、学部斗争委員会を確立するよりから、毎学年の幹部を銀錠をからとり、理執行部をはじめとする一部諸団体の斗争破壊策動をふきとばしていかねばならぬ。

現在、4年生を中心とした当局からさまでまの相力りが加えられこきこいるが、これに付いては率論提出ボイコットの手ひきを中心に当局の策動を粉碎していこう。また、自治会結成の活動が着々進行している大学生をも我々の隊列にまきこんでいこう！

全との学友請願、勝利の日まで決してひるむことなく斗ひぬ二つ！ 全學斗争をやがて！

《アハジコール》

27日～31日 クラスの徹底化（斗争の方向性）

28日 文、斗争委員会

12月

スルダヘ百六十日突破大集会

4日

理、教学生大会

6日

全學斗争委員会